様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３８９

研究課題名（和文）１８世紀フランスにおける演劇モデルによる知の構築

研究課題名（英文）Dramaturgy and the knowledge system in the 18th century of France

研究代表者
阿尾　安泰（AO, YASUYOSHI）

九州大学・言語文化研究科（研究院）・教授

研究者番号：１０２０２４５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円、（間接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：　これまで演劇という視点は、時系列的に論じられることが一般的であった。そうした観点からはこのジャンルが１８世紀において果たした重要性を十分な形で指摘することができなかった。この時代の演劇を１７世紀や１９世紀のものと比較するのではなく、同時代の他の領域との活動との関係を調べることで、演劇という枠組みが領域横断的な影響を及ぼしていることが判明するとともに、そこから生まれる知の体系の独自性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Generally,drama is studied historicaly and chronologicaly.But from that point of view, we cannot explain clearly the important role that drama plays in the 18th century in France. Studying the dynamic relations between drama and other intellectual activities in 18th century instead of comparing plays of the 18th century with those of the 17th and 19th century, we can understand the originality of the knowledge system in the Age of Enlightment.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：１８世紀　フランス　ジュネーヴ　ルソー　演劇　ティソ　パリ　フーコー

１．研究開始当初の背景
（１）１８世紀研究の進展
1990 年代以降、１８世紀フランス研究は二つの方向において大きな進展を遂げてきた。多くの研究者を動員する総合的研究と特定の作家について深く調べていく個別研究である。

（２）逆説的閉塞状況
ところが、この二つの研究はお互いに密接な連関を取ることなく、互いの成果を反映し合うこともないため、研究の発展にもかかわらず、その可能性が限定されていくこととなっていた。その状況を改め、両者を結びつけながら、新たな研究の可能性をはかる必要があった。

２．研究の目的
（１）研究の関連づけ
これまで関係の薄かった総合的研究と個別研究の成果を結びつけながら、両者の成果を考慮しながら、それを踏まえたうえで、関連づけから生まれる新たな観点からの研究の可能性を考える。

（２）領域横断的視点の採用
関連づけの視点として、演劇が提示する知の枠組みというものを考える。ただし、従来のように、文学的な領域だけに射程を限定するのではなく、哲学、社会、政治、さらに医学、化学などの分野にまで対象を広げ、演劇が提示する見方が影響を及ぼしていくことを明らかにする。

（３）１８世紀の独自性の解明
演劇というモデルが、認識の枠組みに重要な影響を及ぼして、１８世紀の知のエピステーメーが成立していくことを明らかにする。そして、そこから生まれる言語文化空間における活動の独自性を明確な形で提示する。

３．研究の方法
（１）多方面にわたる資料の収集
対象とする文献資料を文学的、哲学的な領域だけに限定するのではなく、幅広い領野、医学や化学などの方面にまで拡大する。ルソー、ディドロなどの思想家からティソ、ビヤンヴィルなどの医学者にまで及ぶ文献資料を対象とする。またスイス、ジュネーヴ、フランス、パリにおいても資料収集を行う。

（２）連続的史観の批判
これまで１８世紀研究は歴史的な視点を重視するあまり、１７世紀や１９世紀との連続性を重視する傾向があった。しかし、こうした観点にあまりとらえられると、１８世紀の独自性が見失われる恐れがある。そこでこうしたアプローチからは距離を取り、１８世紀の言語文化空間の中で、様々な活動がいかに連関を取りながら、独自の動的な世界を作り出しているかについて注目することにする。歴史的分析よりは構造論的な分析を行う。

（３）言語文化空間の探求
求められるべきは、１８世紀の言語文化空間の独自な構造の探求であり、広範囲におよぶ活発な知的運動を可能にした条件の解明となる。そのため、後世に影響を及ぼす人々を重視するというよりは、当時において主導的な活動を行う人々に注目する。それにより、現代の視点を過去に単純に投影するという時代錯誤的な誤りを避けることを目指す。

（４）海外も含む学会への参加と研究発表
視点をこれまでにあまり考察されたことのない方向にまで拡大していくために、海外も含む研究者たちの動向に配慮するとともに、国内・国外において発表を行い、貴重な指摘を受けることを目指す。海外ではとくに、国際啓蒙学会に参加し、発表を行う。

（５）ワークショップの開催
個人で研究視点の拡大を目指しても、限界がある。そこで他の研究者たちとの共同作業を通じて、相互交流、意見交換の中から、新たな研究の可能性を目指す。

（６）研究成果の公表
研究成果は学会発表、論文などによって、公表するだけでなく、人名のデータベースなどは、申請者の HP を通じて公開するとともに、必要に応じて、たえず更新しながら、状況に対応していく。

４．研究成果
（１）演劇モデルの広範囲の利用
これまで１８世紀フランス演劇は、演劇史において１７世紀古典主義演劇と１９世紀ロマン主義演劇を単につなぐものとして、あまり重視されてこなかった。しかし、この時代を綿密に調査すると、また異なった面が見えてくる。演劇を単なるジャンルの観点から眺めるのではなく、その活動が提示する知の枠組みを考える。演劇なるものを巡って展開する活動を追求していく。そうした中で明らかになるのは、演劇について提示されている問題設定とその提示の様式が、演劇以外の領域でも取り入れられているのがわかる。当時の人々が知的活動を行うとするときに信頼すべき伝達様式として依拠するのが、このモデルによるビジョンである。

（２）認識の枠組みとしての演劇
１８世紀フランスにおける、この演劇的な視点成立の背景には、認識論、美学論の分野における議論の深まりがある。審美的な経験を明確な形で展開しようとする中で、演劇体験が規範となり、それを論理的に整合化していく方向が模索されていった。その過程が確立されていく中で、その図式に依拠すれば、

人々の共感を呼び、問題なく説得できるという了解も生まれていった。こうして、明証性を志向する領域においては、演劇モデルに基づく論証方式が採用されていくこととなった。

（３）明晰な図式を必要とする状況
　明らかな見取り図を必要としたのには、この時代特有の事情がある。１８世紀は「啓蒙の世紀」という呼称にもかかわらず、すべてが光りの中にあるというわけではなかった。無知、迷信、偏見などとの闘争は絶えず進行中であった。もちろんそうした活動の中から、医学や化学などをはじめとする領域で、従来の停滞状況を脱するような新たな活動が展開する。逆に言えば、知の光の及ばない闇の領域としての「悪」の部分が明確化していくのがこの時代の特徴であり、その戦いの武器のひとつとして演劇モデルが脚光を浴びることになる。

（４）１８世紀の知のエピステーメー
　この演劇モデルの分析を通じて、１８世紀の知のシステムの構造が明らかとなる。そこには、「見ること」と「語ること」の密接な連関がある。はっきりと視覚化されたものこそが、言語化、論理化できる対象であり、逆に言えば、論理化するには、対象を明確に視覚の対象としなければならない。さらに、この関係はもうひとつの別の方向性を示している。このように明確化の基盤が確立されてこそ、多くの人々が知を共有できる場の出現が可能となる。そうした場の要請を、この時代は忘れることはできなかった。啓蒙の世紀は知の基盤を確立するだけでなく、それをよりどころにして、できるだけ多くの人々に共有の機会を与えることを志向したのである。

（５）新たな枠組みの成立に向けて
　このように１８世紀の知の独自性が明らかになってくる中ではじめて、これまで連続性を強調することが普通であった１９世紀との関係において、１８世紀と１９世紀の知の枠組みが示す相違が鮮明になってくる。１９世紀において知のシステムは変化を遂げている。もはや「見ること」と「語ること」は、かつてのような関係をもつことはない。１９世紀においては、むしろ直接には見えにくい「生命」などの不可視の対象が探求されていくことになる。そして、人々の共有する場が問題となるよりは、場を構成する個々の主体の多層性の方が問題となってくるのである。こうした比較により、逆に１９世紀以降に展開する近代化の独自性も明らかになってくる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）
①阿尾　安泰、「読書という悪の発見」、『平成 23 年度～平成 25 年度化学研究費助成事業研究成果報告書』、査読無、2014、pp.43-56
②阿尾　安泰、「１８世紀、語られるもの、語られないもの」、『比較社会文化』、査読有、第 19 号、2013、pp.1-9
③阿尾　安泰、Les analyses de *L'Onanisme* de Samuel-Auguste Tissot -Au delà de la notoriété et de l'oubli、『比較社会文化』、査読有、第 18 号、2012、pp.25-31
④阿尾　安泰、「１８世紀における演劇性の問題」、『言語文化論究』、査読有、第 28 号、2012、pp.157-169

〔学会発表〕（計　３　件）
①阿尾安泰、「・・・と文学」－混淆性の探求に向けて、日本フランス語フランス文学会、2013 年 10 月 27 日、別府大学
②阿尾安泰、１８世紀への問題提起、日本フランス語フランス文学会東北支部会、2012 年 11 月 3 日、岩手県立大学
③阿尾安泰、Les analyses de *L'Onanisme* de Samuel-Auguste Tissot、13th International Congress for Eighteenth Century Studies、2011 年 7 月 27 日、Graz (Austria)

〔図書〕（計　１　件）
サミュエル＝オーギュスト・ティソ（阿尾安泰　他訳）、国書刊行会、『オナニスム』、2011、322

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~ao/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者
阿尾　安泰（AO Yasuyoshi）
九州大学大学院・言語文化研究院・教授
研究者番号：１０２０２４５９

(2)研究分担者なし
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者なし
（　　）

研究者番号：